

「日本には寄付文化がないからスポーツが育たない」という話をよく耳にする。諸外国では寄付というものが広く認知されており、日本とは比べものにならない。その原因には文化や歴史、宗教、法律、慣習等々、さまざまな要因があり、どれも一朝一夕で解決できる問題ではない。

日本スポーツ界は、寄付よりも企業や行政に頼っていた。しかし今、その企業や行政が悲鳴を上げているためスポーツは厳しい状況に置かれている。こんな状況であるからこそ寄付という言葉が改めて聞こえてくるのかもしれないが、日本

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



には本当に寄付文化が根付いていないのだろうか。

「ここ数年は参加できないけど、毎年地元のお祭りには1万円を寄付しています。子供のころから参加しているこのお祭りがいつまでも続き、自分の子供にも

寄付文化の醸成

参加してほしいから」との話を聞いたことがある。また甲子園出場の際に多額の寄付がOB、保護者、地域から集まるという。これこそが日本における寄付文化なのではないだろうか。

お祭りは地域の恒例行事として何十年もしくは何百年と続く「歴史」がある。甲子園出場はその学校や関係者、地域の「誇り」となる。それらには目に見えない対価があるわけではない。それでも寄付が集まるということはその人たちにとっ

て何十年もしくは何百年と続く「歴史」がある。甲子園出場はその学校や関係者、地域の「誇り」となる。それらには目に見えない対価があるわけではない。それでも寄付が集まるということはその人たちにとっ

いから、寄付が集まらないのではないか。そこまで崇高なものでなくてもスポーツが私たちの生活に必要な存在となれば、スポーツにももっと寄付が集まるだろう。スポーツも公共財として地域住民になくて

スポーツはどうあるべきか、スポーツの存在意義とは、を改めて考えていかなければいけない。健全育成や人格形成、地域コミュニケーションの再生などスポーツにはその潜在能力は十分にある。生活に欠かせないものと認知されて初めてスポーツにも寄付文化が根付いたと言えるのである。

他人からお金を頂くには、それに見合うだけの価値がなければならぬ。スポーツにはそれだけの価値があるのか。そしてその価値は自らで作り出すものなのである。(REGISTA A有限責任事業組合代表)

〓隔週土曜日掲載